

第219回山口西田読書会（2019年11月9日）

第218回（2019年11月2日）のプロトコル 担当 田中克典
テキスト 西田幾多郎『働くものから見るものへ』

前回読書会の要約 働くものから見るものへ 前編 内部知覚について

113ページ後ろから5行目～115ページ5行目までを輪読

（五 第3段落途中から第4段落途中）

冒頭、佐野先生から、「具体的一般者」について、概要以下の説明を受けた。

一般者

抽象的一般者→特殊を対立するものとしている段階

具体的一般者→特殊を取り込んだ段階

(konkret) (具体的な)

⇒zusammen (共に) wachsen(成長する)

このことをふまえて 以下、今回の読書会

具体的一般者について 空間における一例

一々の空間→空間として一般的 (抽象的一般者)

限定 (例 このペンが占める空間) →主語となって述語とは
ならない→個物となる (具体的一般者)

アルストートル 白→黒

色 (一般者) という『基體』が背後になければならない

→この色 (個物) として主語となる

一般的なるもの→主語

特殊なるもの→述語

ボサンケー 判断の主語としての實在 ○○がある

○○→具体的一般者

物が性質を有つ、物が働くという「判断」

一般的なる物→主語 特殊なるもの→述語

第二本體 (たとえば人間)

「述語となるから真の本體ではない」と考えられそうだが

共通的述語 (抽象的一般者) ではない、反対 (否定) を含みうる (アリ
ストートル) と考えられる

∴) 第二本體に於いて→ 一般的なるもの→主語→特殊なるものを含む
→具体的一般者となる

一般的なるもの→主語→唯一性を失う→限定される事→一つの中心ではな
く→全体を包む (具体的一般者)

このペンは○○である→このペンはいったん「ペン一般」になる→そし
てこのペンとして限定→このペンとはちがう他のペンを (否定しながらも
含みながら) このペンを語る

自己の限定としての自己 (抽象的一般者) の中→多くの特殊をみる

→具体的一般者となる

主語としての一般者（具体的一般者→すべての形（特殊）を内に含む→すべての『特殊』は成立する（述語となる）

第4段落

主語としての一般者→（それだけでは）働く（見る、認識する）ものではない

一般が特殊との関係であるに過ぎない

働く基體

質料→判断の主語としての基體+形相を含む

特殊なるもの→一般的なるものを含まねばならない

主語となって述語とならない質料→無→積極的意義→内に形相を含む

→働くものとなる

（例）木、石（潜在的質料）→家（形相）

⇒働くもの

※『善の研究』第二編第8章「自然」との関係

真の自然は…抽象的概念ではなく、…それぞれ特色と意義とを具えた具体的事実である。（第3段落）

一般的なるもの→一般的なるものとして→主語の位置→働くものではない

一般的なるもの→（単にすべてを含んだ）単なる全体でしかない

（この段階では抽象的一般）

特殊なるもの→特殊なるものとして→一般的なるものの位置に立つ

→始めて働く（認識し、見る）ものとなる（⇒具体的一般者となる）

偶然的なるもの→必然的

『人間は教養がある』→人間一般を表現しているだけで、具体的人間を認識、見る（働く）ものではない。

○○さんは教養がある。

○○さんは教養がない。

○○さんという特殊性が人間という一般性に含まれる→○○さんという人間について働く（認識し、見る）ものとなる。

ここに至って、人間は具体的一般者となる。

【哲学的問い】

抽象的一般者が具体的一般者となっていく推進力は何か？

抽象的一般者が具体的一般者となっていくことの意義を西田はどう考えていたのだろうか？